

試験研究成果普及情報

部門	野菜	対象	普及
課題名:ペーパーポットを利用したニラの稚苗育苗法			
<p>[要約]ペーパーポットを利用したニラの稚苗定植栽培では、育苗様式は育苗箱を地面に直接置き、根を這わせる「直置育苗」とし、播種は3月下旬に、定植は5月下旬～6月上旬に行う。育苗培養土中へ微細な肥効調節型肥料「マイクロロングトータル70」を2.5～5g/リットル混合することで、育苗期間中の追肥が省力化でき、且つ定植後の活着も促進される。</p>			
<p>キーワード(専門区分)栽培 (研究対象)野菜類-ニラ</p> <p>(フリーキーワード)ニラ、ペーパーポット、稚苗、育苗方法</p>			
<p>実施機関名(主 査) 農業試験場北総営農技術指導所畑作営農研究室</p> <p>(協力機関)香取農業改良普及センター</p> <p>(実施期間)1998年度～2000年度</p>			

[目的及び背景]

本県におけるニラの栽培面積は、香取郡山田町を中心に233ha(平成12年度)であるが、近年生産者の高齢化もあって、栽培面積は減少傾向にある。作業の中でも、苗取りおよび定植作業は屈み姿勢となるため、苦痛な作業となっている。ここでは、移植機を利用するための前段階となる稚苗育苗について、ペーパーポットを利用した育苗を取り上げ、播種および定植時期、育苗方法などがニラの生育、収量などに及ぼす影響を明らかにする。

[成果内容]

- (1) ペーパーポットNo.15((株)日本甜菜製糖、セル容積34ml)を使用した稚苗定植栽培では、3月下旬頃播種し、本葉が6枚前後展葉した5月下旬～6月上旬に定植する(図1)。
- (2) 6月上旬定植を基準として、定植が2週間遅れるごとに約1割ずつ減収する。定植圃場の準備は早めに行い、遅くとも6月10日前後までには定植する(図2)。
- (3) 育苗様式は、育苗箱を地面に直接置き、根を這わせる「直置育苗」とすることで、従来の多くの葉菜類で用いられている「棚置育苗」に比べてかん水労力を軽減できる。また、「直置育苗」は「棚置育苗」に比べて、育苗日数を同一とした場合太い苗が生産できるため、定植後の茎数は多く推移し、上物収量も増加する(図3)。
- (4) 育苗培養土中へ、微細な肥効調節型肥料(商品名:マイクロロングトータル70、12-10-11、溶出期間70日)を1リットル当たり2.5～5g混合することで、育苗期間中の追肥が省力化でき、且つ定植後の活着も促進される。結果として、混合しなかった場合に比べて収穫時の茎数は多く、上物収量も増加する(図4)。

[留意事項]

- (1)「直置育苗」を行う場合は、育苗床の土壤消毒を徹底する。また、育苗箱を設置する前に、3要素を10a当たり10～15kg程度、高度化成などで施用する。
- (2)中苗用育苗箱を使用する。

[普及対象地域]県下全域

[行政上の措置]

[普及状況]

[成果の概要]

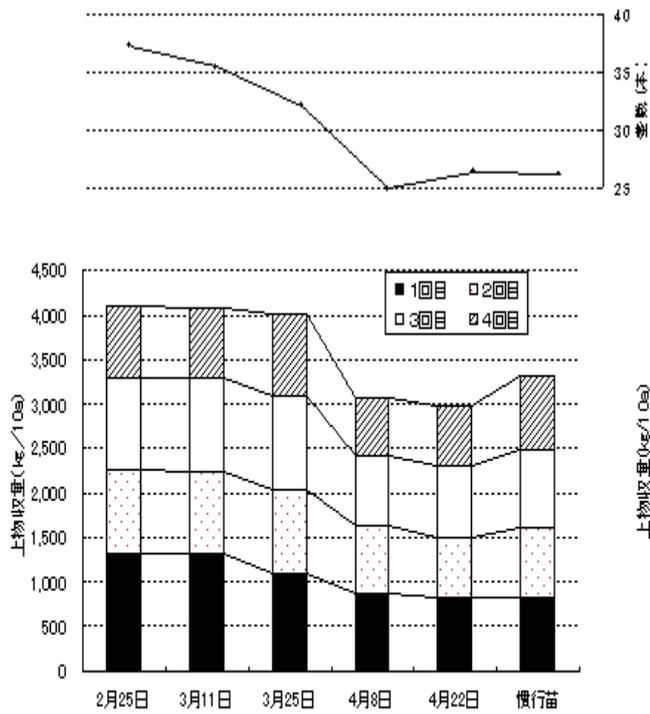


図1 播種日がニラの茎数、収量に及ぼす影響

- 注 1) 慣行苗の播種は1998年3月29日、定植は7月9日
 2) 収穫日：1回目：1999年1月21日、2回目：2月15日
 3回目：3月15日、4回目：4月15日
 3) 供試品種：「スーパーグリーンベルト」、播種粒数：ポット当たり2粒

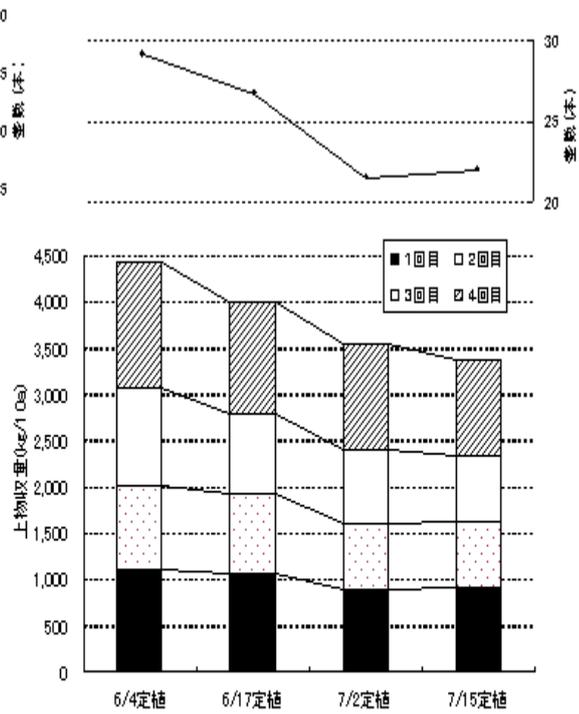


図2 定植日がニラの茎数、収量に及ぼす影響

- 注 1) 播種：1999年4月14日
 2) 収穫日：1回目：2000年1月21日、2回目：2月15日
 3回目：3月15日、4回目：4月15日
 3) 供試品種、播種粒数は図1と同じ。

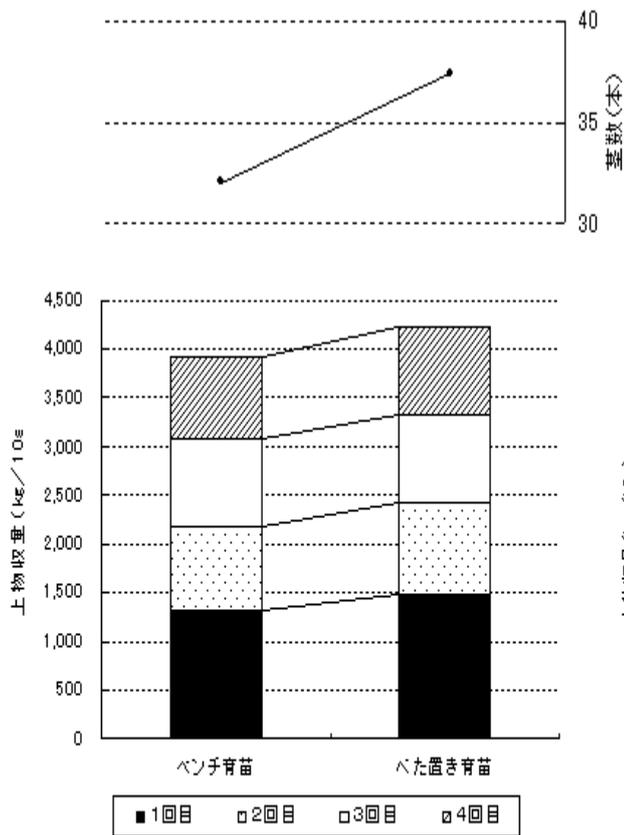


図3 育苗様式がニラの茎数、収量に及ぼす影響

注 1) 播種：1998年3月24日、定植は5月24日
 2) 収穫日：1回目：1999年1月26日、2回目：2月24日
 3回目：3月22日、4回目：4月20日
 3) 供試品種、播種粒数は図1と同じ。

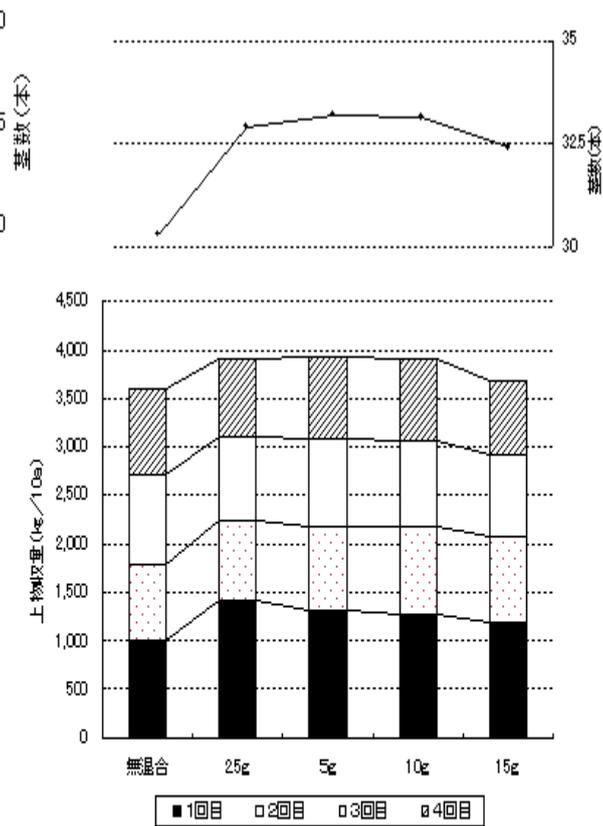


図4 育苗培養土への微細な肥効調節型肥料の混合量がニラの茎数、収量に及ぼす影響

注 1) 播種：1998年4月14日
 2) 収穫日：1回目：1999年1月26日、2回目：2月24日
 3回目：3月22日、4回目：4月22日
 3) 供試品種、播種粒数は図1と同じ。
 4) 使用した培養土：ニッテンネギ専用、使用した肥効調節型肥料：マイクロフト-株70 (12-10-11)

[発表及び関連文献]

平成10、11年度野菜試験研究成果概要集(公立)－関東東海1－
 平成13年度試験研究成果発表会(野菜)